

富山県における初誕生までの儀礼と食べ物
—昭和前期と平成期を比較して—
Rituals and Foods until the First Birthday in Toyama
—Comparing Heisei Period with Early Showa Period—

宮田 佳奈 深井 康子
MIYATA Kana FUKAI Yasuko

【要 約】

子どもの成長を願う満1歳までの祝い事に食い初めと初誕生がある。食い初めの儀礼により、子どもが正式に家族の仲間入りをしたことを意味し、満1歳の初誕生は食い初めとは異なる祝い方が昔から行われてきた。本研究は、富山県における食い初めと初誕生の儀礼に着目し、昭和前期と平成期では儀礼の祝い方や料理などがどのように変化したかについて比較することを目的とした。また食い初めについては富山県内で提供されている店での実態を聞き取り調査し、考察した。昭和前期と平成期では祝い方の形や祝い膳の品数や料理が変化したにもかかわらず大切な子どもの成長を願う家族の儀礼として変わりがなく、店で用意される祝い膳は伝統的な料理で構成されていることが明らかになった。

キーワード 食い初め 初誕生 祝い膳

I 緒論

一生に一度の大切な儀礼として、子どもの成長を願い、現在でも受け継がれている満1歳までの祝い事が食い初めと初誕生である。食い初めとは、子どもに祝い膳を整え、近親者の長寿の人や父方の祖母が一粒だけ子供の口に入れて食べさせる真似をし、子どもが正式に家族の仲間入りをしたことを祝福することである。富山県内では生後100日目に「一生食べ物に困らないように」との願いを込めて、入善町では「くいぞめ」、氷見では「一粒食い」、砺波地方では「百日の一粒まんま」^{1) 2)}とも言う。

次に、初誕生は初めて迎える誕生日のことである。県内では「一生健康に暮らせるように」との願いを込めて、母方の祖父母がもち米一升で作った豆入りのもちと白の重ねもちを「誕生もち」として贈る³⁾。また、女の子は赤飯、ぼたもちを作ることが多いが、男の子は力もちと

いって一升の大きなもちを作り、子どもに背負わせたり、川へ流すところもある。子どもが、誕生前に歩くと鬼子だといひ、もちをかつがせても歩くと、突き転がしたりする⁴⁾と言う。

深井⁵⁾は、大正末期から昭和20年ごろまでの昭和前期の富山県の食い初めと初誕生の儀礼の様子を生きた思い出の実例を通して、それらの儀礼の意義について考察を行った。そのなかで食い初めと初誕生の儀礼は、子どもの健やかな成長を祈願する親や周囲の人々の温かく強い意志に支えられて行われた⁶⁾と報告している。

本研究では、生活様式の変化に伴い伝統的な習俗が薄れつつある今日、平成期になって食い初めと初誕生がどのように祝われてきたかを調査し、昭和前期と比較し、人々の暮らしとともに変化してきた子どもの通過儀礼の変遷について考察する。

II 目的

本研究では、富山県における食い初めと初誕生の儀礼に着目し、平成期の儀礼のあり方について昭和前期と比較するため調査を行った。また、富山県内の仕出し店の実際も調査し、平成期の儀礼について富山県内の子どもの満 1 歳までの通過儀礼の変化について考察することを目的とした。

III 調査方法

1 子どもの儀礼の調査

(1) 調査対象者

調査対象者は、調査時に健在で富山県で学童期を過ごした富山短期大学食物栄養学科 2 年生および同大学専攻科 1 年生の保護者、106 名とした。調査用紙を配布し、回収数 94 で回収率 89%、そのうち有効回答は 69 となり有効回答率 73%であった。

(2) 調査時期および調査方法

調査時期は、平成 26 年 6 月 10 日に調査用紙を配布し、自記式調査法により 7 月末までに回答してもらい、直接に回収を行った。

(3) 調査内容

調査内容は、以下に示すような項目とした。

1) 調査対象者の属性

調査対象者（以後、対象者）の属性は、①生年・性別・結婚年、②小学生の頃と結婚時の住所・居住地区・家族の職業、③第 1 子の生年・性別を記載してもらった。

2) 食い初めの儀礼と食べ物

食い初めの祝い方、祝い日、祝い膳を図示し、思い出を記述してもらった。

3) 初誕生の儀礼と食べ物

初誕生の祝い方、食べ物、思い出を記述してもらった。

2 富山県内仕出し店での聞き取り調査

(1) 調査店

富山市内の小林商店（富山県富山市布市 740）と朝日町の紋左（富山県朝日町沼保 1184）の 2 店とした。

(2) 調査時期および調査方法

調査時期は平成 28 年 6 月 26 日および 7 月 24 日に訪問し、店主に直接聞き取りをした。

(3) 調査内容

聞き取り調査の内容は以下に示す項目とした。

1) 店の歴史

2) 食い初めの祝い方

3) 食い初めの祝い膳

IV 結果及び考察

1 子どもの儀礼の調査

(1) 対象者の属性

対象者は、男性 1 名（全体の 1%）、女性 68 名（全体の 99%）で合わせると 69 名であった。対象者の生年は、昭和 35 年から 44 年生まれが全体の 70%で大半を占め、次いで昭和 24 年から昭和 34 年生まれと昭和 45 年から昭和 48 年生まれを合わせると 30%であった。結婚年は、昭和 60 年から平成 6 年が全体の 78%、昭和 52 年から昭和 59 年が 22%を占めた。すなわち、本研究の対象者の特徴は、昭和 35 年から 44 年生まれが約 7 割であり、昭和 60 年から平成 6 年に結婚した者が約 8 割を占めることが明らかになった。

表 1 に対象者の小学生の頃および結婚時の住所を示した。小学生の頃と結婚時に富山市に住む人が全体の半数以上を占めており、次に黒部市他、高岡市、射水市であった。県内でみると小学生の頃は呉東 68%、呉西 32%、結婚時は呉東 70%、呉西 30%となり、結婚後も住所の移動はほとんどなく、呉東が呉西より 2 倍以上多く居住していた。

表 1 対象者の住所 (名)

住所 区分	呉東		呉西				合計
	黒部市他 ¹⁾	富山市	高岡市	射水市	南砺市他 ²⁾	氷見市	
小学生	11	36	6	8	6	2	69
結婚時	12	36	9	4	5	3	

注：1) 黒部市、魚津市、滑川市、立山町、上市町、入善町、朝日町

2) 南砺市、砺波市、小矢部市

表 2 対象者の居住地区 (名)

居住地区 区分	居住地区							合計
	市街地	商店街	工場 周辺	農村	漁村	山村	その他	
小学生	30 (43)	8 (12)	1	25 (36)	1	2	2	69
結婚時	40 (58)	2 (3)	0	25 (36)	0	2	0	

注：() は全体に占める割合 (%)

表 2 に対象者の小学生の頃と結婚時の居住地区を示した。居住地区のなかで商店は対象者がいなかったため省いた。小学生と結婚時ともに市街地が最も多く、次に農村であった。小学生の頃と結婚時を比べると、農村は変化がなかったが結婚時では市街地が 15% 増えたのに対して商店街は 9% 減少し、居住地区の移動がみられた。

表 3 に対象者の小学生の頃と結婚時の家族の職業を示した。漁業は対象者がなかったため省いた。小学生の頃は、製造業が最も多く全体の

32% となり、職工とその他の会社員がともに 13%、商業が 12% の順であった。結婚時は、小職業の変化はほとんどみられなかったが、結婚時に製造業と職工がともに 6% 減少したが、会社員が 3% 増加したことがわかった。

表 2 より結婚時、農村に居住していた人は全体の 36% で多いにもかかわらず、表 3 では農業が全体の 3% で顕著に少なかったため、表 2 より結婚時の居住地区における農村の職業を調べ表 4 に示した。農村では、製造業が 36% を占め、農業とその他の兼業農家を合わせると全体の

表 3 対象者の家族の職業 (名)

職業 区分	農業	商業	製造業	職工	公務 自由業	売薬	その他	合計
	小学生	2	8	22	9	4	3	
結婚時	2	9	18	5	4	1	30	

注：その他 小学生：会社員 9 公務員 3 自営業 2 兼業農家 2 ボイラー技士 1 金融 1 無記入 3

結婚時：会社員 11 自営業 3 兼業農家 3 専業主婦 2 事務所 1 看護師 1 歯科衛生士 1

金融 1 団体職員 1 無記入 6

表 4 結婚時に農村に住んでいた対象者の職業 (名)

職業 区分	農業	商業	製造業	職工	公務 自由業	売薬	その他	合計
農村	1	2	9	0	1	1	11	25

注：その他：兼業農家 3 会社員 2 主婦 2 事務所 1 看護師 1 無記入 2

表 5 第 1 子の性別による生年 (名)

生年	性別		合計		
	男児	女児			
昭和	54～57	1	1	2	15
	58～60	2	6	8	
	61～63	1	4	5	
平成	元～4	9	15	24	54
	5～7	2	28	30	

16%であった。すなわち、本研究の対象者の結婚時の職業の特徴は、農村に居住しているが製造業が多く、農業および兼業農家は少ないことがわかった。

表 5 に対象者の第 1 子の性別による生年を示した。第 1 子 69 名のうち男児が 15 名で全体の 22%、女児が 54 名で全体の 78% を占め、女児が多かった。生年は、平成 5 年から平成 7 年生まれが 43% で最も多く、次に平成元年から平成 4 年生まれが 35% となり、平成生まれが全体の 78% を占めた。平成生まれの次に多かったのは、昭和 54 年から昭和 63 年生まれで全体の 22% であった。この結果から本研究の時代背景として平成元年から平成 7 年までの間に食い初めと初誕生を行った儀礼の様子であることを明記しておきたい。

(2) 食い初め

1) 第 1 子の性別による祝い方

富山県内では、食い初めのことを全体的に「お食い初め」と呼んでおり、少数回答には結婚時、高岡市の「ひとつぶくい」、射水市の「100 日」、

富山市の「^{ももかぜん}百日膳」という呼び方が認められた。

食い初めを行ったと答えた対象者の第 1 子の性別で比べると、69 名のうち、男児 15 名中の 14 名で全体の 93%、女児は 54 名中の 46 名で 85% が行っており、男児が女児より 8% 高い割合で祝っていた。すなわち、平成期に食い初めを行った対象者は 60 名となり全体の 87% を占め、深井⁷⁾ が調査した昭和前期の 89% と本調査の平成期を比べると、食い初めの祝いに対する意識はほぼ変わらず高いことが明らかになった。

表 6 に第 1 子の性別による食い初めの祝い方を示した。全体では「家族だけでなんとなく祝った」よりも「家族や実家の両親などと共に祝った」「小児用の膳・食器を特別に準備した」が多かった。性別で見ると、男児、女児ともに約半数以上が「家族や実家の両親などと共に祝った」ことがわかった。小児用の膳・食器については、男の子用は朱塗り、女の子用は外側が黒塗りで内側が朱塗りの漆器を基本としている⁸⁾ が、子どもが大きくなって離乳食用にも使えるようにプラスチックや陶器製の食器を用いたこ

表 6 第 1 子の性別による食い初めの祝い方 (複数回答) (名)

祝い方	性別 (人数)		合計 (n=60)
	男児 (n=14)	女児 (n=46)	
家族だけでなんとなく祝った	4	16	20
家族や実家の両親などと共に祝った	8	29	37
小児用の膳・食器を特別に準備した	6	27	33
歯固めの石を用意した	0	5	5
その他	1	2	3

表 7 結婚時の住所による祝い日 (名)

住所		祝い日 (日)				合計	
		80	100	110	120		
呉東	黒部市他	0	11	1	0	12	46
	富山市	1	28	1	4	34	
呉西	高岡市	0	6	0	1	7	14
	射水市	0	4	0	0	4	
	南砺市他	0	1	0	0	1	
	氷見市	0	2	0	0	2	
合計		1	52	2	5	60	

とが記述してあった。また、男児にはなかったが女児 5 名は歯固めの石を用意していた。歯固め石はご膳の隅に小石を置くと歯が強くなる⁹⁾という言い習わしがある。本研究では結婚時、黒部市に居住の 1 名が歯固め石の代用とは書かれていないが「歯固めとして箸を用意した」と記載してあった。

2) 住所および居住地区別による祝い日

表 7 に結婚時の住所による祝い日を示した。呉東と呉西を比べると、100 日目に祝った人は呉東が 46 名中 39 名で 85%、呉西が 14 名中 13 名で 93% であった。すなわち富山県内では、100 日目の食い初めの祝いを行った人が 52 名で全体の 87% となり、一般的であることがわかった。次に、110 日と 120 日に行ったのは、呉東が 13%、呉西が 7% となり、呉東のほうが呉西よりも多

く、富山市が特に多かった。富山県史¹⁰⁾には食い初めの祝い日を 100 日にとすると子どもが食いしん坊になることから、10 日延ばして行くと記載してあった。すなわち、食い初めは各家庭により 100 日を避けて 110 日や 120 日にも行っていることがわかった。

表 8 に結婚時の居住地区による祝い日を示した。居住地区の商店、工場周辺、漁村、その他は対象者がなかったため省いた。市街地は 100 日が 86% を占め最も多く、110 日、120 日も各々 6% を占めた。商店街、山村は対象者は少ないが全て 100 日で祝っていた。農村は、100 日が全体の 90% で多く、120 日もわずかにあった。これらの結果より 100 日はいずれの居住地区でも最も多く、110 日、120 日は特に市街地で祝われることが推察された。

表 8 結婚時の居住地区による祝い日 (名)

祝い日 (日) 居住地区	祝い日 (日)				合計
	80	100	110	120	
市街地	1	31	2	2	36
商店街	0	2	0	0	2
農村	0	18	0	2	20
山村	0	2	0	0	2
合計	1	53	2	4	60

3) 祝い膳の料理と思い出

表 9 に食い初めの祝い膳の料理名と出現数を示し、図 1 に 100 日の食い初めの祝い膳 A~D を示した。

表 9 より飯は赤飯が最も多く、次いで御飯、おかゆ、小豆飯であった。少数回答では寿司やのり巻きもあった。汁はみそ汁やすまし汁を用意した人が多かった。特に、はまぐりやあさりなどの貝類を椀種とし、みつばを吸い口として用いた。主菜となる魚は、鯛の焼き物が最も多く、次いで頭付き魚、刺身であった。魚の種類は、鯛が多く、鱈や鮭なども少数みられたが、祝い膳には鯛がどの魚よりも目出たい主役であ

ることがわかった。

次に図 1 より、100 日の祝い膳をみると魚の代わりに大きな紅白の鯛の形をした「かまぼこ」(D) がみられた。鯛のかまぼこは、富山県の祝事に欠かせない食べ物である。煮しめや煮物は人参、大根、しいたけが多く、油揚げや高野豆腐、昆布を使ったという回答もあり、筑前煮も少数みられた。品数は、(B) が一汁六菜で菜の数が最も多いが、全般的には一汁四菜であった。

特徴的な食べ物にはハンバーグ (A)、サラダと金平・梅干し (B)、茶碗蒸し (C) があった。その他では果物が最も多く、次いで煮豆、酢物、

表 9 食い初めの祝い膳の料理名と出現数 (複数回答) n=60

①飯	赤飯	49	③魚	鯛の焼き物	43	④煮物	煮しめ・煮物	42
	御飯	7		頭付き魚	14		お平 (おへら)	3
	おかゆ	3		刺身	11		持椀	2
	小豆飯	1		鯛	5			
②汁	みそ汁・すまし汁	51		煮魚	1			
				白身魚	1			

その他：果物 22 煮豆 13 酢物 10 茶碗蒸し・紅白もち 8 和え物・漬物 5 サラダ 4

卵焼・五種盛・ハンバーグ 3 梅干し 2 プリン・エビフライ・金平 1

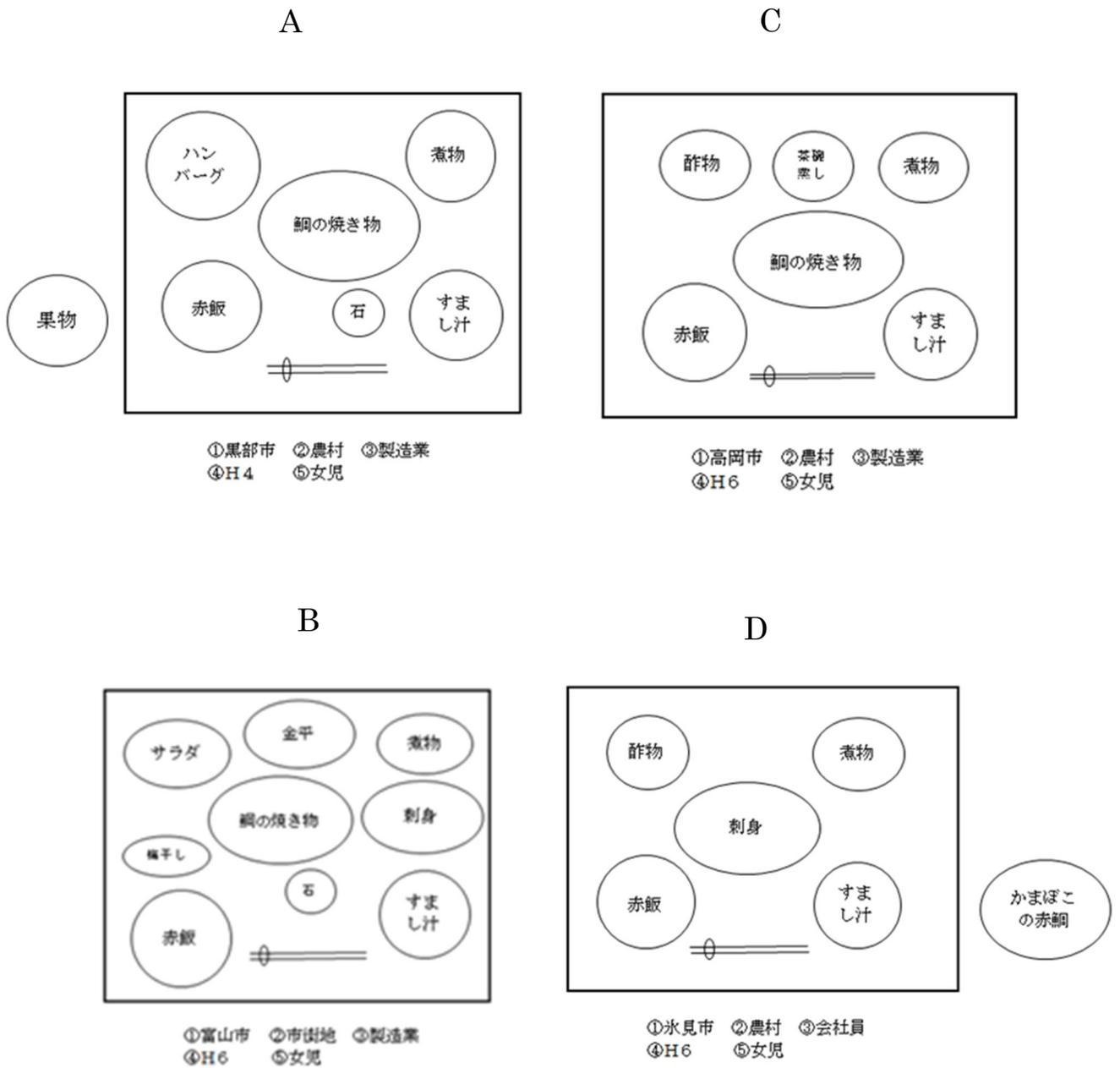


図1 100日の食い初めの祝い膳

①結婚時の住所 ②結婚時の地区 ③結婚時

茶碗蒸し・紅白もちの順で、サラダやハンバー
グ、プリンなど昭和前期にはなかった食べ物が
並べられた。すなわち、食い初めの祝い膳を昭
和前期と平成期で比べると、平成期はあまり形

式にこだわらず、子どもが好きなものや喜びそ
うな食べ物を用意する家庭が増えてきたのでは
ないかと考えられる。

表 10 食い初めの思い出

娘は春生まれでお食い初めの時は着物を着せず（夏だったの）手作りのワンピースとブルマ、帽子の 3 点セットを着ました。赤ちゃんの服を縫うのはとても苦勞しましたが兄と姉は着物を着てのお食い初めでしたので季節柄、着物を着せてやれなかった分、あえて、手作りの服をきせてやりたいと思いました。赤飯を一口入れてやり、たくましく育てほしいと願いました。	(黒部市・農村・製造業・H2・女兒)
娘は食べ物を唇に当ててやると口を開けて今にも食べそうなそぶりをしました。当日、白いベビー服の上に着物をはおり、座いすに倒れないように支えられ、家族皆に見守られながら「強い丈夫な歯が出来ますように」「一生食べ物に困りませんように」と声をかけながら食べ物を与える儀式となりました。	(黒部市・農村・製造業・H4・女兒)
娘は食欲が旺盛で口の前へ食べ物を持っていくと何でも口を開けて食べようとしていました。当日は両家の家族が集まり、一人一人に御膳とかご盛りが用意され、着物をはおらせた娘を囲んでにぎやかに祝いしました。そして、家族全員で家族写真を撮りました。	(富山市・市街地・会社員・H4・女兒)
母方の祖父母や曾祖父母と一緒に母の実家で祝いました。形式ばらずに家族で祝いたいと思っていたので食事は祖母と曾祖母の手料理でお祝いしました。箸の先に煮物や汁物を付けて口元にもっていきと美味しそうになめていました。お赤飯を 1 粒口に入れてやると困ったような顔をして、舌で上手に口の中から出してしていました。その姿がおもしろく、みんなで笑っていました。	(高岡市・市街地・製造業・H6・女兒)

() : 結婚時の住所・地区・職業・第 1 子の生年・性別

表 10 に食い初めの思い出を示し、その様子を
表した写真を示した。

思い出の内容は、いずれも心温まるもので、
生まれてきた子どもに元気に育てほしいとい
う家族の願いが変わりはないことが明らかにな
った。また、各々の家庭で代々伝えられてきた
祝い方でやっていることもわかった。すなわち、
儀礼としての食い初めのあり方は、生活様式
の変化や伝統的、文化的な習俗の薄れにより時代
とともに変化しつつあるが、伝統的なしきたり
とともに儀礼にこめられた思いや祈りを大切に
次世代に継承していく必要があることが示唆さ
れた。



両家の家族と祝う食い初めの様子
(富山市・市街地・会社員・H4・女兒)

(3) 初誕生

1) 祝い方

初誕生を祝った対象者は、69 名のうち、男児 15 名中 15 名で 100%、女児 54 名中 47 名で 87% だった。平成期に初誕生を行った対象者は 62 名で全体の 90%であり、食い初めの祝いを行った 87%より初誕生を祝ったほうが 3%高かった。また、性別で比べると男児のほうが女児より 13%多く祝っており、性別による祝いの違いは食い初めと同様に男児が女児より多いことが明らかになった。すなわち、家族や親族などの近親者は女児より男児の祝いをより重要な儀礼として捕えていることが推察された。

2) 食べ物と思い出

表 11 に結婚時の住所における初誕生の食べ物を示した。全体的にもちを準備した人が最も多く、おはぎは高岡市と氷見市にのみみられた。深井¹¹⁾は、昭和前期におはぎを用いているのは射水、氷見に多く、もちとは全県にみられたと報告している。本研究では、おはぎは射水市ではなかったが氷見市に認められた。昭和前期¹²⁾では少数回答として「赤飯、まんじゅうで祝った」と記載されていたが、平成期には時代を反

映して「ケーキで祝う」という家庭もあった。

これらの結果から、現代では誕生日にバースデーケーキを食べる習慣が日常的であるため、初誕生も同様にこの習慣が定着してきたものと考えられる。

表 12 に結婚時の住所における初誕生のもちの種類を示した。呉東は主に誕生もち、呉西は誕生もちと紅白もちを使用していた。誕生もちとは、もち米一升で作った豆入りのもちと白の重ねもちのことで、豆は「まめ(健康)」に、一升は「一生」、つまり「一生健康に暮らせるように」と願いをこめて用意した。富山市では「白・黒もち」がみられたが、黒もちはおそらく豆もちのことであろう。

次に、表 13 にもちで祝った子どもの身体と行為の関係を示した。もちを「背中に背負わせる」が全体の 75%で、圧倒的に多く、次に「尻をたたく・あてる」が 11%であった。昔からもちには不思議な力があると信じられ、子どもにもちを背負わせることにより「小児の身につき、健康で力強くなる」と信じられていた¹³⁾ということから特別な願いが込められていたと想像される。

表 11 結婚時の住所における初誕生の食べ物(複数回答) (名)

住所 食べ物	呉東		呉西				合計
	黒部市 他	富山市	高岡市	射水市	南砺市 他	氷見市	
もち	12	29	3	4	1	1	50
おはぎ	0	0	5	0	0	1	6
その他	2	4	1	0	2	1	10

その他：ケーキ 4 (黒部 富山 南砺 氷見) 牛乳かんケーキ 1 (黒部) 赤飯 1 (南砺)

紅白まんじゅう 1 (富山) 何も準備しなかった 2 (富山) 無記入 1 (高岡)

表 12 結婚時の住所における初誕生のもちの種類 (名)

住所		もち				
		誕生もち	紅白もち	白・黒もち	鏡もち	その他
呉東	黒部市他	8	3	1	0	0
	富山市	17	5	5	1	1
呉西	高岡市	2	1	0	0	0
	射水市	2	1	0	1	0
	南砺市他	0	1	0	0	0
	氷見市	0	1	0	0	0
合計		29	12	6	2	1

表 13 もちで祝った子どもの身体と行為の関係 (複数回答)

行為	身体				合計
	背中	尻	足	足の裏	
背負わせる (しよわせる・かつがせる)	42	2	0	0	44
たたく・あてる	0	6	1	0	7
ぶつける・投げる	0	1	1	1	3
打つ・つける	0	0	1	0	1
かつける	0	1	0	0	1
合計	42	10	3	1	56

表 14 に初誕生のもちの思い出を示した。食い初めと同様に家族全員で行うにぎやかな祝い事であったことが伺われる。子どもを取り囲み、家族や親族にとっても楽しい思い出として今も息づいていることが浮きぼりになった。

表 15 に表 11 のもちの次に多かったおはぎで祝った子どもの身体と行為の関係と思い出を示した。おはぎは甘くないおはぎを作ったという。その理由として「おはぎを甘くすると甘い子に育つというので塩辛く味付けした」と書かれていた。おはぎは「尻に打つ」行為が多かった。さらに、「おはぎを甘くせず、甘い親にならないようにと両親も食べました」という記述から子

どもだけでなく両親も共に成長していきたいという強い願いを感じとることができた。

2 仕出し店における食い初めの実態

(1) 小林商店

小林商店は現在 2 代目で創業から 50 年以上営業しており、地域とのつながりを大事にしている店である。先代は石川県七尾から富山にきて営業したそうである。

富山市を中心に仕出しの依頼を受け、平成 27 年度は 1 月以外の月には必ず注文があった。最近ではインターネットのホームページを見て依頼をする方が多く、夫婦と子どもだけの核家族

表 14 初誕生のもちの思い出

<p>紅白もちを背中に乗せて2、3歩前を出ておもいきりしりもちをつき大泣きしていました。その後、誕生祝いをいただき、大喜びでした。(黒部市・農村・事務所・H5・男児)</p>
<p>娘は誕生もちの重さを気にせずニコニコと背負って歩き回っていました。お祝いに来てくれた親類と食事をし、近所と親類に誕生もちを配りました。(富山市・農村・無記入・H7・女児)</p>
<p>リュックに一升二重のおもちを入れて歩かせました。リュックが重くてひっくり返っていましたが重さに慣れてくるとテーブルにしがみついてしっかりと足どりでつたい歩きをしていました。(南砺市・農村・製造業・H4・女児)</p>

(): 結婚時の住所・地区・職業・第1子の生年・性別

表 15 おはぎで祝った子どもの身体と行為の関係と思い出

<p>曾祖母が朝早くからあずきを炊き、一升のもち米で塩味のおはぎを作ってくれました。おはぎをラップにくるみ、風呂敷に包んでおしりにべったんとくっつけました。背中にくりつけたのですがさすがに重くて自分1人では歩けず、曾祖母と祖母が手伝って少しだけ歩きました。重いながらも一生懸命に踏ん張りながら姿勢を維持する姿がおもしろく笑いました。おはぎをおろすと、ほっとした顔をしていました。(高岡市・市街地・製造業・H6・女児)</p>
<p>約15センチくらいのおはぎを風呂敷に包み、背中にしょって、おしりに強めにあてた。子どもは、お尻にあてられるのを驚いて嫌がっていた。(高岡市・市街地・製造業・S60・男児)</p>
<p>家で大人の手のひらサイズのおはぎを作り、つかまり立ちをさせてお尻にぶつけました。早く歩けるように願ってぶつけると聞いています。おはぎを甘くせず、甘い親にならないようにと両親も食べました。(氷見市・農村・会社員・H6・女児)</p>

(): 結婚時の住所・地区・職業・第1子の生年・性別

で行う人も増えてきた。しかし魚屋が食い初め膳を取り扱っているのは少ないのではないかということだった。店主は「昔、食い初めの祝いを行うことが当たり前だったのであまり気にしていなかったが、ここ4、5年で食い初めが行事として話題になるようになってきた」と話していた。

食い初めの祝い膳は、一汁三菜を基本としている。料理は子どもの男女で献立の違いはなく、先代から伝えられたものを今でも変わらず作り続けているそうである。



小林商店 富山市

その献立は、赤飯、吸い物（三つ葉、玉麩）、煮物（鯛、湯葉、真じょう）、飾り物（塩茹での海老、杉いたに白もち）、鯛、フルーツ（オレンジとイチゴ）である。価格は 2500 円程度で料理と膳を別々に届け、各家で盛り付けてもらうやり方だと言う。膳は 3000 円程度で市販されていたもの使用しており、男児は黒と赤、女児は赤の膳を貸し出している。菌固めの石も要望があれば川でとれた石や近所で拾って洗ったものを



紋左 朝日町



小林商店の食い初め膳

供えらるることである。最近では石の代わりに食べられる石の形をしたチョコレートを提供しているそうだ。

(2) 紋左

紋左は屋号が紋左、現在 5 代目の紋左衛門の代で今から 130 年前に創業した老舗の料理旅館である。食い初め膳の注文は年に 2、3 回だそうである。お宮参りと合わせて嫁側の両親と共に行う客が多い。昔は大安に行う家庭が多かったが、平成期には両家の家族の予定に合わせて日曜日に行う家庭が多くなっているそうである。

紋左の食い初めの膳は赤飯、鯛の塩焼きが定番で、鯛はお客様が持参することもあるという。鯛は 1 時間ほどかけてゆっくりと焼く。他に、煮物 3 種、力餅、煮干し、鯛の潮汁を出しており、価格は 3500～4000 円程度である。煮物 3 種は、基本的に大根、しいたけ、人参の組み合わせとし、季節により変化させる。例えば 7 月で



紋左に嫁入りの時に実家が用意した食い初め用の器と子ども用の箸一式

はオクラ、さやえんどう、たけのこなどを盛り合わせる。力餅は、白餅を短冊切りにしたものである。「まめな人になるように」と願って黒豆を用意し、「勝ち」にあやかっただち栗、「喜ぶ」に因んで昆布などが入っており、子どもの成長を願う思いが込められている。煮干しは、2尾の腹と腹を合わせて腹結びにして膳に盛りつけると話していた。

写真の食い初めの器は、女将が5代目に嫁いだ時に実家の母が用意して持たせてくれた食い初め用の器で子ども用の箸もついていた。このような箸付きは大変珍しく、代々受け継がれていることがわかった。

4 昭和前期と平成期の食い初め

本研究から子どもの一生で最初の食物にまつわる儀礼である食い初めについて昭和前期と平成期の違いが明らかになった。昭和前期では両家の親が揃って賑やかに子どもを囲む様子が思い出の記述から推察できた。しかし、今では核家族でありながらも100日には食い初めを行い、親としての務めを果たしてやりたいと思う気持ちに祝い方の形が変化しても変わらないことが示唆された。祝い膳の品数や現代ならではのハンバーグなども並べられるが、仕出し屋や料理旅館で用意される膳は伝統的な料理で構成されていることが聞き取りの調査の結果、明らかになった。

本研究を終えて、富山県内の昔からの店や料理旅館がこれからも各々の家族の要望に応えられるように、日本が誇りにすべき子どもの儀礼を絶やすことなく受け継いでほしいと切に願っている。

V 結論

富山県で学童期を過ごした人を対象者とし、平成期における富山県の食い初めと初誕生の儀礼のあり方について昭和前期と比較し、検討を

行った。その結果、以下に示す知見を得ることができた。

- 1 対象者の属性は、昭和35年から44年生まれが全体の約7割を占め、昭和60年から平成6年に結婚した者が約8割であった。結婚時の居住地区は市街地、職業は製造業が多かった。
- 2 対象者の第1子の性別は、全体で男児22%、女児78%で女児の方が多かった。生年は平成5年から平成7年生まれが43%、平成元年から平成4年生まれが35%となり、平成生まれが全体の78%であった。すなわち、本研究は平成元年から平成7年生まれまでに食い初めと初誕生を行った子どもの儀礼の調査である。
- 3 平成期に食い初めを行ったのは87%で、女児より男児の方が多く祝い、食い初めの祝いに対する意識は昭和前期とほぼ変わらず高いことが明らかになった。
- 4 食い初めの祝い方は、第1子の性別でみると、男児、女児ともに約半数以上が「家族や実家の両親などと共に祝った」ことがわかった。小児用の膳・食器として離乳食用に使えるようにプラスチックや陶器製の食器を用い、歯が強くなるように歯固めの石を用意していた。
- 5 食い初めの祝い日は、住所および居住地区に関わらず、100日が一般的であったが、100日に行くと子どもが食いしん坊になることから、あえて100日を避けて110日や120日にも行っていることがわかった。
- 6 食い初めの祝い膳は、赤飯、みそ汁や清し汁、鯛の焼き物を用意した人が多かった。

- 特徴的な食べ物として富山県では祝事に欠かせない鯛のかまぼこや昭和前期にはなかったハンバーグやプリンなどもみられた。
- 7) 初誕生の祝いは対象者の 90%が行っていた。食い初めより初誕生を祝ったほうが 3%高く、食い初めと同様に女兒より男児が多く祝っていた。初誕生の食べ物は、全体的にもちを準備した人が多く、その種類は呉東では誕生もち、呉西では誕生もちまたは紅白もちを使用していた。また、おはぎは高岡市、氷見市のみにみられた。
- 8) 初誕生における子どもの身体と行為の関係は、もちの場合、子どもの背中にもちを背負わせた家庭が全体の 75%で圧倒的に多く、おはぎの場合は尻に打つ行為が多かった。おはぎは甘くすると甘い子に育つという理由から塩辛く味付けし、甘くないおはぎを作った。
- 9) 富山県内の仕出し店と料理旅館で行われてきた食い初めの祝い方や料理について調査した結果、アンケート調査ではわからなかった平成期における貴重な儀礼の現状を知ることができた。

終わりに、本研究は、平成 27 年度日本調理科会総会(静岡県立大学)で発表したものであり、その後平成 28 年度に富山県内の仕出し店において聞き取り調査したものを加えてまとめたものである。調査にご協力いただいた小林商店および紋左の店主の方には深く御礼申し上げます。

参考文献

- 富山の食事』, 社団法人 農山漁村文化協会, p. 326 (1989)
- 3) 前掲書 1) p. 21
- 4) 前掲書 2) p. 326
- 5) 深井康子, 塩原紘栄:「富山のくらし研究 第 10 報 初誕生までの儀礼と食べ物ー食い初め・誕生祝いを中心にー」, 富山女子短期大学紀要第二十四輯, p. 35 (1989)
- 6) 前掲書 5) p. 47
- 7) 前掲書 5) p. 38
- 8) お食い初め. jp : Okuizome. jp, <https://okuizome.jp/> (2015 年 4 月 29 日アクセス)
- 9) 富山県:『富山県史 民族編』, 富山県, p. 1065(1973)
- 10) 前掲書 9) p. 1065
- 11) 前掲書 5) p. 45
- 12) 前掲書 5) p. 45
- 13) 森隆男:『民族儀礼の世界』, 清文堂, p. 140 (2002)
- 1) 北日本新聞社:『とやまの冠婚葬祭』, 北日本新聞社, pp. 20-21(1992)
- 2) 堀田良:『日本の食生活全集 16 聞き書